

菜の花

小島烏水

青空文庫

市街に住まっているものの不平は、郊外がドシドシ潰つぶされて、人家や製造場などが建つことである、建つのは構わぬが、ユトリだとか、懐くろぎだとかいう気分が、亡なくなつて、堪まらないほど窮屈になる、たとえやにくくても、隙間もなく押し寄せた家並びを見てみると、時々気が詰まる、もし人家の傍に、一寸ちよつとした畠でもあれば、それが如何いかに些細なものであつても、何だか緩和されるような氣になる、そうして庭園のように、他所よそ行きの花卉かきだの、「見てくれ」の装飾だのがしてないところに、又しようとも思わない無造作のところに、思いさま両手を伸ばして欠あびでもするような氣持になれる。

少なくとも、市街は接近した、もしくは市街を前景とした畠は、野菜を作つて、食膳に供給するという実用的の意味に於てよりも、人間と人間との間に踏み固められない、柔かい黒い土を割り込ませて、庇の連続や、肱の突き合いを緩和させるという点だけで、保存して置きたく思う、そういう意味で、保存するとなれば、何も月末の八百屋の払いを、幾分か助けるつもりで、胡瓜や茄子を作る必要はない、黒土のままで残して置いて、春の温氣が土のかおりを蒸し上げるのを、ぼんやり眺めていてもいいのであるが、それではあまりサツパリし過ぎるから、春ならば先ず私は、何を置いても、そこに菜の花を觀たい。

春の花の中でも、私はなぜか、梅や桜や、^{すみれ}菫だの^{たんぽぽ}蒲公英だのよりも、その他の何よりも、菜の花に執着を持つ、少年の時代から、この花が好きで、野外遠足は、菜の花の多そうなところを選んで歩いたものだ、今でも春の景色と云うと、菜の花のそれが眼に浮ぶ、菜の畑の中に^{かが}踰んで、^{あぶ}虻のブンブン^{うな}呻るのを聴きながら、本を読んだり、^{いわゆる}所謂「空想」に^{ふけ}耽つたりしたこともある（その時分は至つてセンチメンタルな気分を悦んだものだ、今でもとかく脱け切らないが）、東海道藤沢の松並木の間から、菜の花の上に^{うか}泛ぶ富士山を、おもしろい模様画に見立てて、富士山と菜の花の配合などを考えたことがある、中にも私の好む菜の花の場所は、相模大山の麓、今は烟草^{たばこ}の産地として名高い秦野付近で、到るところ黄の波を^{つら}列ねていた——併し此頃往つて見たら、それも大方桑畑などに変つて、今じゃあ夢になった、近頃は不思議なほど、菜の花が郊外から影を隠した、物価も租税も高くなつて、菜種の油などを、搾つていては、割に合わぬから、もっと金の儲かるものを植えるのに、何も不思議はないが、私は何だか、夢を喰われたような気がする。

関西地方は知らず、東京横浜間や、その付近の郊外では、今では菜の花を見ると、珍しく振り返るほどだ、そうやって振り返るのも、私ぐらいなものかも知れない、大阪の郊外に住んでいる友人画家織田一磨氏は、「大阪付近では、到るところに金色をした菜の花の

光が、太陽の光線を反射している、菜の花の盛りの時は、総べての物が、皆黄色となる、反射光線の強いのは、ちょうど雪のようだ、そして黄色の野原の末に、紫に烟って見える遠山の色、悪くはおもわぬコントラストだ、そしてその黄色い海の内を、赤い絵日傘の娘が通る」と言つて、大阪の自然の誇りにされたが、東京付近では、そういう自然は、もう見たくとも見られない。「菜の花や月は東に日は西に」「菜の花の中に城あり郡山」などいうのは、春げしきの中で、私が永久に保存したく思っている風景画である。

人に依ると、あの花の馨は、糞ツ臭いから、いやだと言うようだが、幸いに私の嗅覚は、それほど過敏でない故か、ちつとも苦にならないどころか、臭いからして、私はこの花が好きだ、梅の匂いのように上品でないかも知れないが、土臭いのが堪まらなくいい。

併しながら「亡び行く生物」の中に、この菜の花が、次第に加わるのではなからうか、それとも都落ちの仲間に入つて、次第に我等の付近から、影を隠してしまうのではあるまいか、場末の旅籠屋などで、食膳の漬け菜の中から、菜の花の蕾が交つて出ることがあるが、偶然だけに、どんなにか私を悦ばすことだろう。

私の机上には、有り合せの玻璃瓶に、菜の花が投げ込んである、これは弟に捜させて、採つて来たものである、天鷲絨のように、手障りの柔らかな青い葉が、互い違いになつて、

柱のような茎を取りまいて居る、此柱の頭から、苔つぼみが花傘なりに簇むらがって、蛹さなぎむし虫の甲羅のように、小さく青く円くなっている。苔みの集団の下から、房になった黄色い四弁花が、いま電燈の蒼い光にきらびやかに匂かっている、茎は一皮下には、青い血が通っているのではないかと思われるほど透き通って、有あらゆる春の緑の中で、最も練り抜かれた緑である、見つめていると、早春の名残といったような淡い哀愁に加えて、物の末期の惨酷を思わせる姿である。

それにしても、我家の庭に、菜の花の畠はたけが欲しい。

青空文庫情報

底本：「日本の名随筆17 春」作品社

1984（昭和59）年3月25日第1刷発行

1997（平成9）年2月20日第20刷発行

底本の親本：「小島烏水全集 第七巻」大修館書店

1979（昭和54）年11月発行

入力：門田裕志

校正：大野 晋

2004年9月26日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

菜の花

小島鳥水

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>